

季
刊



KIKAN
KADENSHA
vol.11
2018/5/1

言葉を繰り返し体感すると、心が動く

私は日本文学の研究者になる前、約2週間ほど被爆者の方々の講演の同時通訳を務めたことがあります。微細なニュアンスを含めてできるだけ正確に訳そうと努めた結果、3日目にはそれぞれの方の性格もわかり、言外に伝えたいことがみえてきて、手応えを感じていました。ところが5日目に、途中で突然言葉が出なくなりました。

彼らの言葉に何度も繰り返し息を吹き込むうちに、彼らがみた風景や現実、おそらくご本人も折り合っていないさまざまな感情が、言葉を介して私の心の中に同期してしまったのです。訳が止まったことを深く反省した一方で、文学研究を志す者としては、言葉にのせて体感する感情を受け止められてよかったと思いました。

例えば能楽は、600年以上前に書かれた言葉に繰り返し息を吹きこむことで、当時の人々が見たもの、感じたことを追体験できるものです。こうした体験の機会はどんどん減っていますが、子供のうちから体で芸能の力、言葉の力を感じ取る機会をもつことは、とても大切ではないでしょうか。